外国人交換留学高校生の日本における適応過程¹

常磐大学 長 井 進²

Adjustment processes of foreign exchange high school students in Japan

Susumu Nagai (*Department of Human Sciences, Tokiwa University, Miwa, Mito 310*)

The main purpose of the present study was to excavate the adjustment problems of 93 high school exchange students in Japan. Questionnaires including Cornell Medical Index (CMI) were administered longitudinally. In addition, individual interviews were held with those who had failed to adjust to the Japanese society. As for the subjective psychosomatic symptoms manifested in CMI, there was no significant sex difference while Asians were successively found to be significantly more liable to diseases and less adjusted than non-Asians. The questionnaires other than CMI disclosed difficulties which exchange students found in adjusting at Japanese home, including delicate personal relationships with host siblings, apparent lack of affective gestures (hugs and kisses), and early curfew. In the meanwhile, language barrier and trifling rules constituted the primary difficulties they faced at host school. On account of prejudice against women, girls had more unpleasant experiences than boys. Through individual interviews, all of the early returners were found to have already had a basic problem in their home countries.

Key words: exchange student, adjustment, cross-cultural, Cornell Medical Index, sojourner.

近年、留学生の受入れに関する著作が数多く発表されているが、そのほとんどは受入れ態勢の不備を指摘したり、もしくは諸外国との国際関係の将来を憂慮したりしている(例えば、永井, 1970)。留学生受入れをめぐる問題は多岐に亘り、受入れ政策、入学選考方法、学位の認定・取得、奨学金制度、留学生間の待遇格差などの行政的問題、留学生の法的地位の問題、宿舎などの住居問題、医療などの厚生的問題、さらに日本語教育、オリエンテーション、外国人留学生担当者やアドバイザーなどの設置、外国人および外国文化に対する日本人の差別や偏見などの教育的ないし心理学的問題が含まれる。

さて、留学とは、留学生が修得していない学問・技術・芸術などを受入れ国にて修得することであり、それゆえ利益を享受するのは留学生だけであると解する向きもあるかもしれない。だが、それはあまりに偏狭な見方だと言わなくてはならない。受入れ国の度量のなさが原因で、受入れ国に反旗を翻した元留学生の例は枚挙に暇がない。このような悲劇的事態は、われわれの努力によって極力避けなくてはならない。留学は、受入れ国の人人も留学生から新しい知見を得る機会が与えられる人的国際交流であり、また双方が努力を惜しむことなく誠意と寛容をもって交流を深めるならば、互いに異文化を一

層深く理解し、視野が広まると同時に、自己理解も促進され、自国文化に対する洞察も深まるであろう。のみならず、長期的展望に立てば、留学は、受入れ国と留学生の出身国との友好関係を維持し、発展させるための重要な契機ともなりうる。

ところで、昨今、高等教育機関への留学のみならず、高校生の交換留学も盛んである。外国人高校生の日本への受入れは昭和 57 年度において 567 名であった(文部省, 1983)。この受入れ人数は、高等教育機関へのそれに比べれば少ないが、今後、増加の一途をたどることが予想される。それゆえ、受入れ態勢を今こそ再検討し、改善しなくてはならない。

来日する交換留学高校生は、一般家庭にて家族の一員として暮らしながら地域の高校に通学する生活体験者である。彼らは高等教育機関への留学生の場合ほど具体的な留学目的を持たない代わりに、日本文化に深く関わることによって、その良き理解者になることが充分期待できる。彼らは、今後、日本との間の相互理解・交流・協力などの点で貴重な人材と言え、ところが、その受入れの実態や日本での適応などに関する実証的研究は充分に行われていない。わずかに、東京 YWCA 留学生問題を考える会(1974)や綾部・小野沢(1979)らが大学生生活や日常生活に含まれる適応上の諸問題を指摘し、また国立教育研究所(1976)が留学生生活全般に亘る意識調査を行っているにすぎない。

他方、留学生受入れの歴史が長い米国では、留学生の適応に関連した研究が盛んである。研究領域は、異文化

¹ 本研究は、文部省昭和 58 年度科学研究費助成金(奨励研究 A: 課題番号 58710145)によるものである。

² 本研究の遂行に際してご協力下さいました留学生各位ならびに財団法人エイ・エフ・エス日本協会に心から感謝いたします。

適応の段階説 (Oberg, 1960), 適応曲線仮説 (Lysgard, 1955), 語学力 (Leong & Sedlack, 1982), 新しい教育制度への順応 (Klein, Alexander, & Tseng, 1971), 心身両面を含む個人的適応 (Klein et al., 1971), 人種差別 (Becker, 1973), 性差 (Fong & Peskin, 1969) など誠に多岐に亘っている。とはいえ, 交換留学高校生を対象にした研究は多くない。わずかに, 英語使用や受入れ家庭・学校への適応 (Hartung, 1983), 留学体験の個人に及ぼす効果 (Hansel, 1983), 受入れ家庭の受入れ体験過程 (Grove, 1982) などが研究されているのみである。

本研究は, 来日する交換留学高校生が直面する心理学的問題点を発掘することに主眼を置いたものである。というのは, 留学生受入れ態勢の改善には, 留学生が困難なく適応している側面に注目し, それらを促進することにもたしかに重要だが, 現時点においてはむしろ適応の困難な側面を明らかにし, それらを改善することの方が緊急を要すると考えるからである。ところで, 留学生の適応の困難は, 心身の健康と, 受入れ家庭や学校での日常生活に反映される。それゆえ, まず, 留学生の心身の健康状態の変化を明らかにするための質問紙調査と, 家庭・学校での日常生活やその他の場面のいかなる点に適応が困難であるのかを明らかにするための質問紙調査を, 同時並行的に継続的に, 実施する。また, 日本の生活環境への適応が非常に困難な留学生がいる場合には, 個人面接調査を行って, 適応を困難にしている要因を明らかにする。

本研究の実施に先立って, 以下の事柄が予想された。Klein et al. (1971) は米国におけるアジア人留学生が心理的問題を身体的に表わしがちであると指摘しているが, この傾向は出身国の文化社会的背景に基づくものだと考えられるので, ①アジア人留学生の方が, 健康に関して, その他の留学生より多くの身体的自覚症を示すであろう。また, 長井 (1986) は異文化への適応が母国において形成・維持されてきた態度や行動傾向によって規定されるという仮説を提案し, その実証には成功していないが, 妥当な仮説だと考えられるので, ②早期帰国に帰結するような異文化適応の失敗の主要な原因は, 対人関係の基礎を築く親子関係, 社会的スキル, 欲求不満耐性などの母国において形成・維持されてきた要因にあるであろう。さらに, 本研究者によるこれまでの参加観察に基づくものだが, ③留学生とホストの同胞は, 親からの注目に関して拮抗する関係にあるので, 前者は「後者と折合いがよくない」と感じる人が多いであろうし, また④服装・外出・余暇の過ごし方などについての親や教師の指示に不満を感じるであろう。さらに, 娘に対する日本の親の期待が留学生の母国の親のそれとはまったく異なっているので, ⑤外出や服装の制限, また行儀などに関して, 男子より女子の方が欲求不満を感じるこ

が多いであろう。

方 法

被調査者 外国人留学生 (1983 年 3 月中旬から翌年 3 月上旬まで, 一般受入れ家庭にて暮らしながら高校に通学する高校生で男子 23 名, 女子 70 名の合計 93 名。出身国の内訳は, 豪州 31 名, 米国 28 名, ニュージーランド 7 名, マレーシア 6 名, スリランカ 5 名, インドネシア・西ドイツ・デンマーク各 3 名, アルゼンチン 2 名, 英国・イタリア・ポルトガル・メキシコ・ベネズエラ各 1 名。)

調査用具 ①CMI (Cornell Medical Index) 健康調査表 (Brodman らによる原版に, 日本版に付加されている項目を本研究者が英語に翻案したものを付加した)。これによって心身両面に亘る自覚症指標値が求められる。CMI における自覚症の各指標の略記号とその内容は以下の通りである。A: 目と耳, B: 呼吸器系, C: 心臓脈管系, D: 消化器系, E: 筋肉骨格系, F: 皮膚, G: 神経系, H: 泌尿生殖器系, I: 疲労度, J: 疾病頻度, K: 既往症, L: 習慣, CIJ: C・I・J の合計, A-L: A から L までの身体的自覚症指標の合計, M: 不適応, N: 抑うつ, O: 不安, P: 過敏, Q: 怒り, R: 緊張, M-R: M から R までの精神的自覚症指標の合計。②本研究者作成の質問紙。質問紙 I: 異文化適応の失敗との関連を調べるために作成されたもので, 出身国での家庭生活や学校生活に対する満足度, 親子関係, 性格傾向, 以前の海外渡航経験の有無などに関する項目が含まれる。質問紙 II: 来日直後のオリエンテーションでの体験, 受入れ家庭や受入れ校での体験などに関する項目が含まれる。質問紙 III: 家庭生活や学校生活を中心とする異文化体験に関する諸項目が含まれる。質問紙 IV: 質問紙 III に含まれる項目以外に, 異文化体験のさまざまな側面に関する項目から成る文章完成法検査などが含まれる。質問紙 I から IV まではいずれも, 日本における適応との関連性を明らかにすることを意図して英文で作成されたものであり, 回答法は 2 段階もしくは 5 段階の自己評定尺度と自由記述による。しかし, これらからのみでは異文化適応の失敗の条件を明らかにすることは困難である。なぜならば, 回答者の質問内容に対する無関心, 意味の不十分な理解, 回答における防衛的傾向, 意図的な無回答, また自由回答における不適切・不明瞭な表現などの問題が質問紙には伴うからである。これらの問題を避けるために以下の手段を用いる。③調査的面接。日本での適応に失敗した留学生を対象にした, 生育歴・母国の家族・受入れ家族などに関する質問項目が含まれた, 半構造化された面接である。この個人面接を行うことによって, 質問の意味の理解を助けたり, 意味の取り違えを正すための補足的・訂正的発言を行うことが可能にな

Table 1

来日直後の CMI に基づく様々の群の間における CMI の各自覚症指標の平均値に関する差の検定結果

CMI 区 分	男子群対女子群				アジア群対非アジア群			
	来日 直後	同 1 か月後	同 3 か月後	同 9 か月後	来日 直後	同 1 か月後	同 3 か月後	同 9 か月後
A : 目 と 耳								
B : 呼 吸 器 系								
C : 心 臓 脈 管 系								—*
D : 消 化 器 系			*					
E : 筋 肉 骨 格 系						—*		
F : 皮 膚				*				
G : 神 経 系								
H : 泌 尿 生 殖 器 系	***	***	***	***				
I : 疲 労 度		*						
J : 疾 病 頻 度					*	*	*	
K : 既 往 症								
L : 習 慣								
CIJ : C・I・J の 合 計		*						
A-L : 身体的自覚症合計			*					
M : 不 適 応					**	**	*	*
N : 抑 う つ								
O : 不 安								
P : 過 敏 性								*
Q : 怒 り								*
R : 緊 張		*		*				*
M-R : 精神的自覚症合計					*			*

Notes. *' $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

負の符号は、非アジア群の値の方が高いことを示す。

Fig. 1. 全期間回答者群・アジア群・非アジア群における CMI の主要な自覚症指標平均値の変動。

り、また問題に関する幅広い情報の収集が可能になる。

調査手続き まず、来日1週間後に都内のオリエンテーション会場にて CMI と質問紙 I を実施した。次いで、来日1か月後の4月中旬、同3か月後の6月中旬、同9か月後の12月中旬を、それぞれ回答期限とした CMI と質問紙 II・III・IV を留学生の受入れ家庭に郵送し、回答および返送を依頼した。また、異文化適応の失敗の条件を明らかにするために、受入れコミュニティで問題を起こした留学生に個人面接を行った。

結 果

回収率 CMI の回収率は、来日直後すなわち1週間後が 97.8% (男子 95.7%, 女子 98.6%), 同1か月後が 94.6% (男子 95.7%, 女子 94.3%), 同3か月後が 91.4% (男子 87.0%, 女子 92.9%), 同9か月後が 67.7% (男子 60.9%, 女子 70.0%) であった。質問紙 I-IV の回収率は I が 100%, II が 94.6% (男子 87.0%, 女子 97.1%), III が 92.5% (男子 82.6%, 女子 95.7%), IV が 71.0% (男子 69.6%, 女子 71.4%) であった。

(1) CMI. CMI のマニュアルに従って、各留学生の前述した A から M-R までの各自覚症指標値が求めら

Table 2
受入れ家庭での生活における適応困難な事柄の主な内容

受入れ家庭にて	来日 1 か月後 (4 月)	同 3 か月後 (6 月)	同 9 か月後 (12 月)
	(人数)		
驚いたこと	家事はすべて女性が行う 6 子どもがしつけられていない 4 夫は要求が多いだけなのに妻は従順 3 (合計) 36	夫(子ども)の妻(親)に対する無作法 7 家族間の愛情表現がない 6 家事はすべて女性が行う 4 (合計) 24	無回答 0
気にかかること	私の身の安全を家族が気にかけすぎる 6 私のしぐさや行動を笑う 4 家族の食事のマナーがよくない 4 (合計) 31	家族と話し合う機会が少ない 8 自分が好まれていない感じがする 6 私の外出を制限される 5 (合計) 44	家族の鼻もちならない態度 2 姉妹との会話がでない 2 家族の喫煙 1 (合計) 10
いらだたしいこと	意志の疎通がはかどらない 3 お客扱いをされる 3 うちとけにくい人がある 2 (合計) 9	私の外出を制限される 4 家族に話しかけにくい 3 私に対する否定的な態度 3 (合計) 22	私の外出を制限される 3 子どもの親に対する無作法 2 家族の生活のペースに合わせる 2 (合計) 17
厄介なこと	一日三食がすべて日本食 1 ご飯のおかわりをすすめられる 1 母が門限に厳しい 1 (合計) 8	兄弟姉妹とうまくいかない 21 門限が早すぎる 18 友人のことを穿さくされる 3 (合計) 52	兄弟姉妹とうまくいかない 16 父母とうまくいかない 8 受入れ家庭を変えた 4 (合計) 35
問題だと感じたこと	意志疎通が難しい 5 英語ばかりで話しかけられるので日本語が学べない 3 兄弟姉妹が話そうとしない 3 (合計) 18	私の外出を制限される 6 些細な事で家族と口論した 5 自分がまだ日本語を話せない 4 (合計) 26	家族との口論 4 私が門限に遅れる 3 姉妹が気分屋である 2 (合計) 14

Note. 紙数の都合上、度数の小さい回答内容は省略し、主要なもののみを示した。

れ、これらの平均値の変動が分析された。

まず、CMI による留学生全員の健康変化の過程は、各時期に施行した CMI のすべてに回答した留学生(以下、全期間回答者と略称)の回答によって分析された(59名で、男子 13 名、女子 46 名)。Fig. 1 における全期間回答者群の A-L 値は長期的には下降傾向を示すが、CMI の各実施期間内では有意に低下しない。自覚症指標を個別に検定した結果、4 月から 6 月にかけて B ($t=2.384$, $df=116$, $p<.05$) と D ($t=2.034$, $df=116$, $p<.05$) の値が有意に低下していた。M-R 値は常に低い値のままでほとんど変動せず、個別的には M ($t=2.031$, $df=116$, $p<.05$) と R ($t=2.227$, $df=116$, $p<.05$) の値が 6 月に低下するにすぎない。

次に、回答者を男子群と女子群に分け、各群の主要な自覚症指標値の変動が分析された。男子群(来日直後の回答者数は 22 名)の A-L 値が 3 月から 4 月にかけて低下する傾向を示した($t=1.721$, $df=40$, $p<.10$) だけで、その他の自覚症指標値はいずれも各実施期間内に有意な変動を示さなかった。一方、女子群(来日直後の回答者

数は 69 名)の場合、A-L 値も M-R 値も有意な期間内変動を示さなかった。個別的な検定の結果、6 月に M 値のみが低下していた ($t=1.989$, $df=129$, $p<.05$)。

男女群を比較すると、A-L 値(Hを除く)が 4 月に、また M-R 値が 12 月に男女間で一時的に逆転するが、それら以外はすべて女子群の方が高い。各指標値に関する性差を検定した結果(すべて女子群の値の方が大)は Table 1 の左半分に示されている。

次に、留学生を東南アジア諸国出身者群(以下、アジア群と略称)とその他の国出身者群(同様に、非アジア群と略称)とに分け、各群の諸指標の変動を Fig. 1 に示した。両群とも、同一群内における有意な期間内変動を示す指標は皆無であった。しかし、両群間の有意差はいくつかの指標(その大多数はアジア群の値の方が大)に見出された(Table 1 の右半分を参照されたい)。

(2) 質問紙。質問紙 I に関しては、主に 1 から 5 までの尺度値として与えられる回答が分析された。一方、質問紙 II-IV に関しては、主な回答である自由記述の内容が分析された。①質問紙 I。受入れコミュニティでの

適応に失敗して早期帰国することになった留学生が、その他の留学生に比べて特に異なる点は見出されなかった。②質問紙Ⅱ-Ⅳ。留学生は3月のオリエンテーション会場で、概して睡眠も食欲も充分であったが、疲労が目立ち、54名が風邪・頭痛・腹痛など、なんらかの体の不調を訴えた。

次に、留学生の家庭生活への適応過程を調べるために、適応の困難な側面に焦点を絞って設問し、それに対する回答を求めた。これらの質問項目に対する留学生の各時期における主な回答内容は Table 2 に要約されている。

また、受入れ校での生活についても上記と同様の質問項目を用意した。それらに対する留学生の主な回答内容は4月が言葉の障壁や些細な規則などで、訴えの数は通学期間中最大だが、6月には訴えの数は半減し、12月にはほぼ皆無になる。

ホームシックにかかった留学生は3月が33名、4月が48名、6月が44名、12月が22名であった。

家庭・学校以外の場面での不快感体験内容は、男尊女卑の価値観(10名)、不遠慮な凝視(8名)、痴漢(7名)などで、回答者のほぼ全員が女子であった。

(3) 個人面接調査。適応に失敗した5名のうち3名にそれぞれ個別に合計2,3時間かけて面接を行った結果、以下の事柄が明らかになった。すなわち、A嬢(英語圏、女子)は母国で数年前から過食症の治療を受けていた。一方、B君(英語圏、男子)は留学の確たる目的もなく、故郷の友人からの注目を集めるためにのみ来日していた。また、C君(英語圏、男子)は精神的な母子分離ができていなかった。

考 察

本研究においては、被調査者の標本数が充分大きくないことに加えて、多数の条件が統制されなかった。その中には、家族構成・社会経済的地位・居住環境・教育方針・余暇の過ごし方などに関する留学生と受入れ家庭の間の類似性や、学校の教育方針・在校生の成績水準・在校生の規模・共学か否かの別などの受入れ校の諸属性、来日に対する動機づけ・社会的スキル・欲求不満耐性・成績水準・語学力などの留学生の諸属性等々が含まれる。わずかに、留学生の性別・年齢・国籍・宗教・以前の海外渡航経験の有無などの条件が、下位集団の分類基準として統制されたにすぎない。従って、本研究結果の解釈および一般化には十分な注意が必要である。

(1) CMI 一般的傾向 まず、大部分の留学生において、心身の主要な自覚症指標値が3月に最大値を示しているのは、長旅の疲れ、時差ぼけ、寝不足、気候の急激な変化、新奇な環境への適応に伴う緊張や疲労、食生活の変化、オリエンテーションの過密なスケジュールな

どによるものと思われる。4月になっても主要な自覚症指標値がさほど低下しないのは、受入れコミュニティで新しい生活への適応を迫られているからであろう。6月におけるB・D・M・Rの各値の低下は、留学生が概して日本の気候や食生活を含む新しい生活環境によりやく慣れ始めたことを示すものと思われる。

N(抑うつ)値が常に低いのは、これは、一般に留学生が深刻な不適応に陥っていないことを示唆するものであり、また受入れ家庭・受入れ校・受入れ機関のアドバイザーなどによる努力を反映するものであろう。

性差：自覚症に基づく心身の適応面での性差は、男女間で質問内容および項目数の異なる指標H、およびHを含む指標A-Lを除いては、Table 1に明らかなように一時的なものしかない。この結果は、日本人留学生に複数の指標に関する継続的な性差を見出した調査結果(長井, 1986)とは異なる。これは、本研究の被調査者の大多数の出身国では、心身の訴えを男女間で区別せずに許容または受容する社会文化的規準が存在するために生じたものと思われる。但し、男子のA-L値が4月に上昇しているのは、E値とG値の上昇から示唆されるが、男子が新学期の始まった学校で運動部の部活に励んだことによるものであろう。

アジア群対非アジア群：ところで、アジア群と非アジア群の間で比較すると、初夏に両群間に差がほとんど見られないことから、アジア人留学生にとっては日本の気候への順応の困難なことが推察される。また、初冬に種種の精神的自覚症指標値に有意差が見出される(Table 1参照)が、これは彼らの寒さへの順応が困難であり、しかも受入れコミュニティで不快な体験をしていることを反映するものであろう。事実、質問紙Ⅳへの回答で、“家庭で洗濯機の使い方の分からなかったことが学校中に知れ渡り、学校ではそれ以外の事柄についてまで穿さくされ、貧しい国に生まれたことを悔んだ”り、“寒いだけでホームシックになる”などと答えたアジア人留学生が合計5名いた。

Klein et al. (1971)は、アジア人留学生が心理的不適応を身体的に現わしやすい傾向を有すると指摘しているが、本研究ではその傾向は認められなかった。これは今回の被調査者がそれほど持続的な緊張を強いられる環境下に晒されていないからであろう。Table 1において、アジア人留学生の疾病頻度が6月まで高いのは、基本的に気候の急激な変化によるものと思われる。というのは、気候の温暖な6月には疾病頻度は低下し始め、12月には身体がある程度寒さに順応し、非アジア群の疾病頻度と差がなくなるからである。また、アジア群の高い疾病頻度は、部分的には、彼らの西洋医学的治療への抵抗感に基づくように思われる。なぜならば、オリエンテーションの期間中に風邪をひいても医師にかからず、彼ら

に固有の治療法を留学生が実践するのが観察されたからである。また、アジア人留学生の継続的な不適応感は夏期には弱まっているので、これも基本的には気候の変化によるものと思われる。

(2) 質問紙 II—IV オリエンテーション：来日直後のこの期間中に体調を崩す留学生が多いので、留学生に日本の歴史・文化・生活様式や日本語などを学習させるだけでなく、受入れ機関との信頼関係を樹立し、他国からの留学生と親善を深めることによって留学生の滞在中の孤立防止の一助とするための配慮が重要である。

受入れ家庭・受入れ校での生活：来日1か月後 受入れ家庭に入って間もない4月には、留学生が苛立たしく思ったり、厄介に思ったりすることが少ない。これは、意志の疎通は難しくても、留学生自らが積極的に家庭に融け込もうと努力しているからであろう。また、受入れ家族に日本各地に案内してもらおうなどいろいろと歓待され、多くの楽しい経験を受入れ家族と共有するからであろう。一方、学校では適応の最も困難な時期を迎えるようである。言葉の障壁がある上に、行動の自由を規則で縛られる環境下に置かれることを考慮すれば、それも当然のことであろう。些細な規則に反発を示したのは非アジア群だけだが、これは彼らの社会文化的背景を反映するものである。

来日3か月後 6月は心身の自覚症が少なくなるのに反して、家庭への適応が最も困難な時期に相当している。これは、留学生にとっても受入れ家族にとっても、この頃には相手に対する新奇さが消失し始め、各自が地を出すようになるからであろう。また、留学生は春休みほど変化に富んだ日々を送るわけではなく、むしろ単調な毎日が続くからであろう。さらに、ほとんどすべての留学生にとって母国では日没後にも容易に外出できるのに、日本では、特に女子の場合（しかも“よそ様からお預かりしている”女子留学生の場合はなおさら）それが許され難いので、留学生は門限の早いことに不満を感じている。さらに、この時期に受入れ家庭の同胞との関係を厄介だと感じている留学生が多いのは、彼らの価値観や生活様式などが互いに異なるということだけでなく、留学生を受け入れることによって、家族の各人が気配りや我慢を強いられることが多くなったり、他者から自己へ向けられる注目の量が相対的に減少したりするなどの結果が生じるということを、留学生も受入れ家庭の同胞も充分認識していないからではないかと思われる。また、この時期になってもホームシックにかかる留学生が少なくなるのは、大多数の留学生の出身国では日常的な抱擁やロづけなどによる愛情表現がないなどの微妙な相違点に気づき始め、故郷への思いが募るからであろう。ところが、学校ではクラスやクラブで友人もでき始め、多くの種類の授業を受け、また楽しい経験が増える

ので、留学生には学校が過ごしやすいう場になってきているようである。

来日9か月後 12月になると、家庭生活についての驚きがなくなり、留学生に家庭生活のおおよそのイメージが成立しているようである。また、家庭生活への適応に苦慮することも6月に比べると少なくなっており、生活によく慣れているように思われる。この時期には、留学生は、門限を守るなどの家庭の規則や、家庭内での構造化された役割を内面化しているようである。しかし、一方では、家族との関係が難しいという事態が改善されないままの留学生もかなりいるし、受入れ家庭を変えた者もいる。これらを考え合わせると、この時期には家庭に融け込むための努力をするという一次的適応段階はすでに通過し、価値観・信念・生活様式などが基本的に異なる者同士の間に生じるさまざまな欲求不満に耐えるだけでなく、両者間の相違点を認識し尊重しつつ共存するという二次的適応段階を留学生は迎え始めているようである。この段階にあって、問題を回避することなく真剣にそれに取り組むならば、対人関係能力の発達や自己に対するアウェアネスの高揚、また欲求不満耐性の増大などが見出されるはずである。そして、事実、質問紙ⅢおよびⅣに含まれた質問項目“いままでのところ、自分が変わったと感じるようなところがありますか、あれば、それはどのようなことですか”に対して、多くの留学生が、“欲求不満に耐える力が強くなった”、“他人に頼らなくなった”、“視野が広がった”などと回答している。一方、この時期には否定的な批評が少なく、学校にはよく適応しているように思われる。学校生活には問題だと見なされることが少ないが、これは自分が外国人であることを留学生が意識させられ、また家庭におけるほど深く自己関与しないので、決定的な問題も生じ難いということであろう。

ホームシック：ホームシックにかかる留学生の数が6月まで減らないが、このことは、少なくとも最初の3か月間は留学生が新奇な環境への適応に必要な時期であることを示唆するものである。

受入れ家庭・学校以外の場面：家庭および学校の外部で不快な体験をした留学生は、ほぼ全員が女子であり、このことから男子よりも女子の方が緊張感や不快感を強いられる機会がずっと多いことが分かる。

以上、家庭では、必要以上に身の安全を気づかわれて自由に外出が許されず、女性のみが家事に励まなくてはならず、そのうえ学校では、髪型・爪・アクセサリ・服装など学校教育に無関係な事柄について厳しい規則を守らなくてはならず、その他の場面でも女性差別的な光景に出くわし、日本人男性からは好奇の目で見られがちであるなど、女子留学生の方が日本社会への適応の困難なことが示唆される。Fong & Peskin (1969) や

Church (1982) は、性役割の構造化された伝統的な文化圏からの女子留学生は、性役割の構造化されていない文化圏において適応が困難であると指摘しているが、それとは逆方向の主張も真であるように思われる。

(3) 個人面接調査 3名を個人面接調査した結果、日本での不適応の基本的原因が、母国における親子関係あるいは渡航への動機づけの欠如にあることが確認された。これらの事例は本研究者の仮説を支持するものであり、また各国における留学生の選抜過程において改善すべき余地のあることを示唆するものである。また、質問紙Ⅰによる調査結果から明らかなように、質問紙法のみで潜在的な異文化不適応者を見出すのは困難である。ただし、質問紙への回答には回答者の有する“社会的望ましさ”の要因が働くからである。

以上、本研究の結果、外国人交換留学高校生日本の日本における異文化適応の過程は決して平坦ではなく、彼らが各時期にさまざまな場面で種々の問題に直面することが明らかになった。これらの問題の多くは、例えば、留学生と受入れ家族の同胞との微妙な人間関係のように、問題それ自体に対する双方の十分な認識が欠如しているために生じるものと思われる。そして、この種の問題を解決するには、他者理解とともに自己理解を促進するための感受性の訓練が、留学生のみならず受入れ家庭にも望まれる。また、受入れ校や受入れコミュニティにおいては、国際交流への理解を深めるためにも人間的成長を促進するためにも、留学生受入れを通じて何を学ぶのか、そのためには何が必要なのかということなどに焦点を合わせて一層活発な議論が望まれる。質問紙Ⅳに含まれる文章完成法テストへの回答から、留学生が日本における異文化体験を一般に肯定的に評価し、また受入れ家庭、特にその母親との間に強い絆が存在することが明らかである。さらに、帰国後における留学生の将来設計・計画から、彼らの多くが何らかの形で日本との関係の維持・発展に貢献するであろうことが期待できる。これらを考慮に入れるならば、ぜひとも上記の活動が望まれる。

本研究の方法について反省すべき点がいくつかある。ひとつは質問紙における英語の使用だが、一部の留学生に英語の読解および作文が充分でない者がいるので、設問に対する誤解や回答の簡略化が見受けられる点である。調査内容によっては、母国語による回答を許し、分析の際には二言語使用者の助力を仰ぐなどの工夫が必要である。質問紙法の一般的短所を補うために面接法を積極的に活用することも必要であろう。下位集団間の比較を行うには一層多くの標本数が必要である。また、質問紙への反応から、文化に固有の反応の歪みが認められるので、質問紙の項目作成には一層注意しなくてはならない。

留学生受入れの準備をより一層万全なものにするために、今後は、感受性訓練や議論が留学生の異文化体験、受入れ家庭・受入れ校・受入れコミュニティの受入れ体験に及ぼす効果、留学生の要望に一層叶った援助活動を可能にするためのカウンセラーまたはアドバイザーの育成および訓練、受入れ家庭や受入れ校の受入れ体験過程、留学生の再適応の訓練などが研究され、実施されるべきであろう。

要 約

本研究は、来日する交換留学高校生を受入れる態勢の改善に資するための1つの方法として、彼らが直面する心理学的問題点を発掘することを目的に行われた。交換留学高校生の適応の困難は、心身の健康と、受入れ家庭や学校での日常生活に反映されると考え、CMI健康調査表を含む質問紙調査と個人面接調査が、14か国出身の93名の外国人高校生を対象に実施された。

結果：CMIへの回答から、泌尿生殖器系およびそれが含まれる指標を除いて、いずれの指標にも継続的な性差は見出されなかった。一方、東南アジア諸国出身の留学生はその他の留学生に比べ、疾病頻度および不適応感が継続的に有意に高かった。

その他の質問紙への回答から、受入れ家庭においては、その家庭の同胞との微妙な人間関係や門限の早いこと、また抱擁や口づけによる愛情表現の欠如などに対する適応を困難だと感じていることが明らかになった。また、受入れ校においては、生活のあらゆる面に亘る些細な規則と、言葉の障壁に困難を見出した。さらに、男子留学生に比べ、女子留学生は受入れ家庭の内外において不快な体験をより多く持つので、日本社会への適応がそれだけ一層困難なことが示唆された。

個人面接調査の結果、日本での適応に失敗した留学生の全員が来日以前に母国にて基本的問題を抱えていたことが明らかになった。

引 用 文 献

- 綾部恒雄・小野沢正喜 1979 在日留学生の文化接触に関する文化人類学的研究 九州大学比較教育文化研究施設紀要, 30, 33-84.
- Becker, T. 1973 Black Africans and Black Americans on an American campus: The African view. *Sociology and Social Research*, 57, 168-181.
- Church, A. T. 1982 Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- Fong, S., & Peskin, H. 1969 Sex-role strain and personal adjustment of China-born students in America: A pilot study. *Journal of Abnormal Psychology*, 74, 563-568.
- Grove, N. 1982 The study of the dynamics of

- hosting : Preliminary report, 1981-82 phase. *Research Reports*. No.13. New York, N.Y.: A. F. S. International/Intercultural Programs, Inc.
- Hansel, B. 1983 *The A.F.S. impact study report of initial findings*. New York, N.Y.: A. F. S. International/Intercultural Programs, Inc.
- Hartung, E. A. 1983 Cultural adjustment difficulties of Japanese adolescents sojourning in the U.S.A. *Occasional Papers in Intercultural Learning*. No. 5. New York, N.Y.: A. F. S. International/Intercultural Programs, Inc.
- Klein, M. H., Alexander, A. A., & Tseng, K-H. 1971 The foreign student adaptation program : Social experiences of Asian students. *International Educational and Cultural Exchange*, 6 (3), 77-90.
- 国立教育研究所 1976 「アジア人留学生に関する総合研究」報告書 国立教育研究所紀要, 89, 1-252.
- Leong, F. T. L., & Sedlacek, W. E. 1982 A survey of incoming international students. *Counseling Center Research Report* #6-82. College Park, MD : University of Maryland.
- Lysgaard, S. 1955 Adjustment in a foreign society : Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- 文部省 1983 国際交流・協力 文部時報, 1271, 63-69.
- 永井道雄 1970 反抗する留学生たち 朝日アジアレビュー, 1(4), 50-55.
- 長井 進 1986 日本人交換留学生の異文化への適応過程 教育心理学研究, 34, 55-61.
- Oberg, K. 1960 Cultural shock : Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- 東京 YWCA 留学生問題を考える会 1974 留学生は訴える 東京 YWCA 国際部
——1987. 3. 12. 受稿, 1987. 9. 12. 受理——